



ドロッカー幼少年期の教育環境 ——ウィーンの小学校・ギムナジウム時代における オイゲニア・シュヴァルツヴァルトの影響

井 坂 康 志

概要 本稿で試みられるのは、マネジメントの分野で功績を残したピーター・ドロッカーの幼少期の生い立ちの考察である。ドロッカーは、1937年にアメリカに移住して以来、主に企業や産業社会に関する研究を始め、その名は経営やビジネスで広く知られるようになった。しかし、彼の出生地は本来オーストリア・ハンガリー帝国末期ウィーンであり、そこで多くの文化人・知識人と交流し、知的滋養を摂取してきた。本稿では、彼の幼少期の育ちの一端を、特に小学校からギムナジウム時代にかけて彼に影響を及ぼしたユダヤ系教育者オイゲニア・シュヴァルツヴァルトとの関連から考察したく考える。

Abstract What we attempted in this paper is an examination of the childhood upbringing of Peter Drucker, a major achievement in management. He began his research on corporations and industrial society mainly after his immigration to the U.S. in 1937, and his name has been widely known in the world of management and business. However, his birthplace was Vienna at the end of the Austro-Hungarian Empire, where he interacted with a wealth of cultured and cultural figures. In this paper, we examine some aspects of his childhood upbringing, focusing especially on his interaction with Genia Schwarzwald, a female educator who had a great influence on him from elementary school through his time at the Gymnasium.

キーワード P・F・ドロッカー, オイゲニア・シュヴァルツヴァルト, オーストリア・ハンガリー帝国末期ウィーン

原稿受理日 2023年6月22日

序

1919～1927年のドラッカー

ドラッカーはマネジメントの分野で知られるが、同時に1930年代にナチス支配のドイツからロンドンを経てアメリカに渡った亡命知識人でもあった。ドラッカーの業績としては、現在経営学やコンサルティングの理論化と実践領域における双方の評価が存在している。

だが、それ以前に、彼のウィーン時代の経験こそが、その生涯の原点に横たわる一つの大きな要因たりえたことはさほど指摘されては来なかった。本稿が取り扱おうとするのはその一断面である。

彼は幼少年期のシュヴァルツヴァルト小学校校長にしてサロン主催者、オイゲニア・シュヴァルツヴァルトを自伝的著作『傍観者の時代』で一章を割いて丁寧に描写している⁽¹⁾。本稿は、ドラッカーの初期に可能な限り内在しながら、その独自の視座を彼の受けた小学校からギムナジウム（1919～1927年）まで再検討し、そのなかでオイゲニア・シュヴァルツヴァルトという一人の特異な教育者の存在から再構成していくことを目指している。それはドラッカーの年齢に置き換えると、9歳から17歳の約8年間に該当する。イントロダクションの意味を込めて、オイゲニア・シュヴァルツヴァルトの人と業績を概観しておきたいと思う。

1. ドラッカーの学齢期

(1) シュヴァルツヴァルト小学校

ドラッカーのウィーン時代は、小学校からギムナジウムの文脈で見えていくなかでしばしばその特徴が看取される。それはまた、後年のドラッカーとははなはだタイプを異にする知識人たちによる種々の教育上の試みの中にも見出される⁽²⁾。

ドラッカーが通ったシュヴァルツヴァルト小学校は、主に裕福な同化ユダヤ人の子弟が多く通い、最新の教育手法が取り入れられていた。同時に豊かな進取の精神にも富み、

(1) Drucker (1978) 'Hemme and Genia,' pp.24-61.

(2) それ以前に彼は公立小学校に入学しているが、悪筆をはじめとする集団への不適応から私立のシュヴァルツヴァルト小学校に転校を余儀なくされている (Drucker (1978), pp.62-63)。

ドラッカー幼少年期の教育環境——ウィーンの小学校・ギムナジウム時代におけるオイゲニア・シュヴァルツヴァルトの影響（井坂）

ヨーロッパでも最新の独創的教育としてフランツ・チゼック、マリア・モンテッソーリ、ヘルマン・リーツなどによるカリキュラムが盛んに取り入れられていた。講師陣もまた、文化都市ウィーンの知識人に彩られており、法学ではハンス・ケルゼン、音楽では作曲家のエゴン・ウェルネスやアーノルド・シェーンベルク、文学では文学史家のオットー・ロンメル、建築家のアドルフ・ロース、デッサンでは画家のオスカー・ココシュカが教鞭をとっていた。

オイゲニア・シュヴァルツヴァルト（1872-1940）はシュヴァルツヴァルト小学校の校長であり、女子教育の積極的意義を理解したユダヤ系女性である。彼女の個性は際立っており、カール・クラウス『人類最後の日々』やロベルト・ムージル『特性のない男』にも彼女をモデルとした人物が登場する⁽³⁾。オイゲニアと両親の関係は深く、母キャロラインは彼女の設立した女子ギムナジウムの卒業生であり、父は同校の兼任講師という縁もあった。

ドラッカーは当初公立小学校に入学したが、その悪筆と不器用が祟って、学校生活に深刻なレベルで適応できず、両親は、こうした見地から、職業上の知己でもあったオイゲニアに息子の教育を全面的に委ねた。同校は子供の個性と多様性を尊重し、悪筆をはじめ個人の癖や奇行を矯正するのではなく、それに基づく伸長を擁護した。こうした両親の考え方は、息子の教育において、集団的不適応に対する防衛の意味合いをも有した。

彼女の活動は幅広く、教育活動、学校運営から、協同組合食堂や田園学校など多様な社会事業家にまで及んでいた。後に、オイゲニアに自由の教育の真骨頂を認めたドラッカーは、「彼女には人間的欠点も多く存在したが、得意とするものについては抜きん出ている」と彼女の放つ異彩を強調している⁽⁴⁾。

彼女は「ウィーンを教育した女性」としても知られ、当代きっての俊英として創造的な人間形成を積み重ねていく、個性と生命力に溢れる女性だった。彼女自身が、旧帝国の陋習と戦い、自由を勝ち取る人生を歩んだ。1895年から1900年にかけて、哲学、文学に親しみ、オーストリアでは、女性の留学はもちろん、博士号の取得も認められていなかった当時、スイスの大学で教育学を専攻、博士論文ではベルトルト・フォン・レーゲンスブルクにおける隠喩と比喩を取り上げた。若き日にウィーンにおいて、アドルフの同僚であったヘルマン・シュヴァルツヴァルト（1869-1939）と結婚し、1901年に女子高等学校を買収、女性の大学進学支援に先進的経験を積み上げていった。さらに第一次大戦中には社会事業に着手し、建築家のアドルフ・ロースと共同で経営を行っている。

(3) クラウス（1971）、ムジール（1964）。

(4) Drucker（1978）、p.39.

これらの学校は管轄の教育省からの支持は得がたかったものの、ウィーンのブルジョア階級の賛同者によって、女子学校並びに男女共学の小学校が支持されていた。男女共学の小学校の認可は1905年、女子中高校、大学進学試験実施許可は1910年に得ている。女優のヘレーネ・ヴァイゲル、社会心理学者のマリー・ヤホダ、作家のヒルデ・シュピールは彼女の教え子であり、「オイゲニアの娘たち」と呼ばれた。

(2) オイゲニア・シュヴァルツヴァルトの教育観

一方でシュヴァルツヴァルト夫妻はアドルフ・ロースの設計したウィーン8区ヨセフシュテッター通り68に居住し、しばしば開催されたサロンには、ゲオルク・ルカーチ、エリアス・カネッティ、カリン・ミカエリス、ライナー・マリア・リルケ、ロバート・ムーヅル、カール・クラウス、ヘルマン・ブロッホ、カール・ポパーなどのそうそうたる文化人が来訪した⁽⁵⁾。

オイゲニアは、教育にとって重要なのは、教員の質と考えた。彼女にとって教育とは芸術であり、教師とは子供の創造性を引き出す芸術家でなくてはならなかった。彼女は次のように述べている⁽⁶⁾。

「子供にとって、退屈であることは有害であり、なんとしてもこれは避けなくてはならない。喜びこそが生命の源である。喜びと愛情に満ちた心は、創造性へとつながり、それによって、子供たちは、書いたり、話したり、熱心に体験したり、本物を読みふけり、朗読、そして演技に夢中になれる」

ドラッカーの転校がどれほど颯爽たる救いを本人にもたらしたかは、「私の知る限り、尿とフロア・ワックスの臭いのしない唯一の学校であった」との言にも明示される⁽⁷⁾。本来学力に恵まれた彼は、集団圧力の苦役とは対照的に、ユニークな教師に就いて安定的に個性を伸ばすまたとない一時期を得た。履修教科は、算数、読み書き（国語）、フランス語、工芸、宗教、体育、歌・合唱、さらに学年が進むと自然科学、地理、歴史が加わった。ドラッカーは1923年までの約4年間、教師や同級生といきいきと接した形跡がある⁽⁸⁾。

それはまさしくシュヴァルツヴァルト小学校の教師陣の力量によっている。これには、

(5) Bischof, et al., (2012), p.207.

(6) 村山 (2015), p.57.

(7) Drucker (1978), p.42.

(8) Drucker (1978), 'Miss Elsa and Miss Sophy,' pp.62-82.

ドラッカー幼少年期の教育環境—ウィーンの小学校・ギムナジウム時代におけるオイゲニア・シュヴァルツヴァルトの影響 (井坂)

3人姉妹の教師の一人、エルザ・ライスの存在が少なからず寄与している。エルザは校長兼4年生担任として、子供を一人の自由な人格とする一貫した視座から教育を試みた。事実、エルザは彼の強みに目を向けた初の教師だった。

週6日、5日に4時間、ドラッカーはエルザの授業を受けた。「平和主義は学校から始まる」がエルザの言葉として残されている。彼女は、子供の劣等感をなくすべく平等に接しており、男子は騎士、女子はたくましい女性として育てようとした。生来の悪筆ではなく、作文への傾注をドラッカーに求めた。生徒の卓越性の集中的喚起によって、アイデンティティの所在を本人に告知させた。

興味深いことに、強みの共同探索は『傍観者の時代』の記述に随所に見られる。エルザはドラッカーの達意な作文と高度な内省の力を、ノートブックを用いた対話を基礎として引き出し、突き詰めながら、やがて自律的成長の軌道に乗せる努力を惜しまなかった。自信を失いかけていたドラッカー本人にも、また転校させた両親にも、願ってもない僥倖であった。弱みの自覚によって腐蝕しかけていた彼にとって、精神を鼓舞し、学校生活の再出発を可能とした。

ドラッカーは教師エルザを人類の贖罪のために十字架にかかったキリストになぞらえている。エルザは、「卓越性を凝視する」行動にすべてを賭け、救済的な実例を与えたと理解された。こう指摘したすぐ後でドラッカーは以下のように続ける⁽⁹⁾。

「日曜日に牧師が教会で話して聞かせるキリストとは違って、私という罪人の長所に目を向けさせてくれるキリストだった」

後の人生航路においても、シュヴァルツヴァルト小学校での体験はささやかな救済の含みを持った。実際に、以後80年以上にわたって、文筆家としてのアイデンティティを堅持しえた中には、明らかに少年時代の恩寵体験を認めることができる。

2. ウィーンの知識人

(1) デブリンガー・ギムナジウム

さて、ここでシュヴァルツヴァルト小学校を卒業した後も、ドラッカーとオイゲニアの

(9) Drucker (1978), p.66.

縁に途切れが生じなかった点をも見ておきたい。それに際して、デブリンガー・ギムナジウム進学後のドラッカーにも言及しておく必要がある。

1918年には第一大戦での敗北を受けて、ハプスブルグ帝国は崩壊し、共和制が施行されていた。このような動乱期の1919年にドラッカーはシュヴァルツヴェルト小学校を卒業し、デブリンガー・ギムナジウムに通常より1年早く入学する。いわば飛び級である。同校はドラッカー家と同じ19区の徒歩30分ほどの区画に位置している。ウィーン人口の約10%はユダヤ人に占められていたが、特にリベラルな地区のギムナジウム在籍者においてその割合は半数近くに及んでいた。1885年に男子校として開設、1922、23年に男女共学となり、女子教員も採用されるようになった。ギムナジウムはドラッカーと同等、もしくはそれ以上の階級の裕福な家の出の者が多かった。後の卒業生には科学者のヴォルフガング・パウリやリヒャルト・クーンなどの独創的な仕事を行った知識人の姿があった⁽¹⁰⁾。

ギムナジウムでは、宗教、ドイツ語、ラテン語、ギリシャ語、歴史、地理、数学、自然史、物理と化学、哲学入門、ドローイング、作文と習字、体育などが履修された。得意科目は歴史、地理、物理実験だった。ドラッカーはユダヤ系ながら、生前にルター派のキリスト教に改宗したため、宗教は選択制（カトリック、プロテスタント、ユダヤ教）で、プロテスタントを履修したと記録されている。ほとんど生理的な違和感に近く、多くは一人でいるか図書館で読書した。

ドラッカーの回想によれば、ギムナジウム時代は小学校時代の固有の輝きを失ってしまった時期としても語られる。とりわけ教室にあって、画一と凡庸の支配するほとんど薄曇りのような時代であり、ギムナジウム時代への違和感は、個の創造性を締め付けるモノトーン的印象によって特徴づけられる。

というのは、ドラッカーにとってギムナジウムの教師たちは、たんに退屈さに慣らされただけの人々だった。同時にギムナジウムは多様性の欠落した場であり、控えめに言って自由な創造性の発揮にとってふさわしいとは言いがたかった。ドラッカーの指摘によれば、ラテン語やギリシャ語は「戸惑いを覚えるくらいやさしかったし、戸惑いを覚えるくらい空虚だった」⁽¹¹⁾。人間の内奥に潜む輝き、教師や仲間たちとともに行う創造的行為の喜びと意義は遠く過ぎ去った。事実、退屈の感覚は、小学校時代に知らずにいたものだった。ドラッカーの次の述懐が本音を明かしている⁽¹²⁾。

(10) 村山 (2014), p.55.

(11) Drucker (1978), p.72.

(12) Drucker (1978), p.71.

「8年間のギムナジウム生活を通じて、並以下の授業を行える教師にさえ、ほとんど出会わなかった。ほとんどの教師が、ほとんどの時間、学生たちを退屈させ、すべての時間を自ら退屈して過ごしていた」

すべての生徒が校舎の門をまたぐや、義務的に一律の非創造性を課せられるのはドラッカーの自由な精神の歓迎するところではなかった。彼がギムナジウムに感じた乖離は、後に記述されるいくつかの省察でも明示される。彼の世界観を背後にあって支えたのは、画一的で非人間的なギムナジウムを記憶の原点としつつ、精神の自由な飛翔を妨げるシステムへの抵抗であった。その意味で、人間の多様性の積極的肯定ならびに自由の主張こそが、ドラッカーの教育観を根拠づける当のものとなった。

(2) シュヴァルツヴァルトのサロン

『傍観者の時代』にも、少年時代のサロン参加のもつ社会教育上の教訓を記述した個所がある。ユダヤ人によるサロンは、パリやベルリンでも盛んに開催されていたが、中でも最も活発であったのはウィーンだった。豊かな人脈や富、特権を保持したユダヤ人であっても、伝統的中枢から排除されてきた歴史的経緯もあり、ユダヤ人のサロンでは富や地位よりも、創造性や才など人間的要因を重視する自由な空間を提供していた。

そのような状況において、オイゲニアもまた夫ヘルマンとともに、グルンドル湖畔の別荘へと進出し、サロンの女主人として采配を振るっていた。ドラッカーにとってのサロンは、出席する自由な知識人たちの自己開示の場として、精神に照明の灯をともし創造的空間でもあった。サロンには作家のカリン・ミカエリス、ジャーナリストのドロシー・トンブソン、ロバート・ムージル、エリアス・カネッティ、トーマス・マン、ヘルムート・モルトケなどのそうそうたる文化人が集っていた。このような生活周辺環境が、ドラッカーの依拠する思惟の原点をなし、逆にヨーロッパを脱出してからも、豊かな人格形成上の土壌として作用した。

ドラッカーはまた、ギムナジウムの外の世界に意識的に参入しようとした形跡がある。彼が大人の世界に対して鋭敏な観察眼を発揮しえたのも、ギムナジウムの閉鎖性と限界を部分的にせよ脱出し、時代をその眼で凝視する願望を持っていたためであろう。また、後に振り返るところによると、学内では勉強しないことが往時の学生気質からすれば格好の良いものでもあったという。学外で展開されるサロン文化への参画は、そのような意味で、刺激的な記憶として書き記されてもいる。

その点において、シュヴァルツヴァルト小学校に始まるオイゲニアとの出会いは、再び卒業後も観察者としての自覚を促した。オイゲニアのサロンは、情報や知識を仕入れたりと、出会った人が別の新たな人を連れてきたり、垣根を超えたネットワークの中心ともなった。彼女の人を呼び集め参加者の精神を刺激する才のおかげで、熱気に溢れ、見事な調和を示した。ここでドラッカーは、オイゲニアのサロンを「後に現れたテレビの討論番組の構成とそっくりであった」とも指摘する⁽¹³⁾。

ギムナジウムという閉鎖環境に逼塞したドラッカーにとって、サロンはこの上ない避難所ともなった。様々な領域で活躍する大人たちが何を考え、どのような言葉を口にしたかを知るうえで鮮烈な体験をももたらした。サロンは一市民代表としてのオイゲニアと著名な文化人との当意即妙の応答が一種の呼び物となっていた。ドラッカーはこうして参入した文化人の象徴的空間をトーマス・マン登壇時の次のような描写をもって表現しようとした⁽¹⁴⁾。

「私が彼女のサロンでマンに会ったのは確か16歳の時だった。ノーベル賞をもらう数年前だったが、彼はすでに大作家の列に入っていた。彼は、著作の一つ『混乱と幼き悩み』だったと記憶する——を朗読した。もちろん、参会者の誰もが、すでにこの著作を読んでいた——しかも年若い参会者の大部分は、この著作が若者に対して変にもわかりがよく媚びへつらっているようなところがあったうえ、今日のいわゆる『ポップ・サイコロジー』みたいなものを全編にわたって展開していたので、この著作を毛嫌いしていた。私たちの熱のない反応を感じ取ったのか、マンは機嫌を損ねた」

このような歴史を彩る文化人たちが、若きドラッカーにとって彼らの心内の揺れを垣間見させた。それがなんともみずみずしく、人間的である。そのことが、ドラッカーの場合、サロンにおいて立ち止まって考える機会を与え、自らの置かれたウィーンやその慣習的機能不全や、それへの期待値を不断に吟味することを彼に要請したと考えてよい。

加えて、知的自叙伝『傍観者の時代』において、第一部は「アトランティスからの報告」と題されるウィーン時代の経験的著述がある。アトランティスとはプラトンの著作に登場する伝説の国であって、広大な大陸であり、同時に殷賑を極めた王国でもあった。王

(13) Drucker (1978), p.51.

(14) Drucker (1978), p.53.

国は強大な軍事力を背景に世界の覇権を握ろうとしたが、救いがたい驕慢が神ゼウスの逆鱗に触れ、海中に沈められた。アトランティスとは、少年時代を過ごした欧州の失われた都の隠喩であったのは彼自身も自覚的に記すところである。その記憶はドラッカーの少年時代、すなわち出生から17歳あたりまでの軌跡とほぼ時代的に一致しており、オイゲニア・シュヴァルツヴァルトのサロンが古きウィーンへの懐古的志向性によって、幻影の大陸アトランティスのイメージに重ね合わされていたのは間違いない。

まさにサロンにおけるオイゲニア特有の執着には、自身気づいていない暗部を孕むものがあつたとドラッカーは指摘する。それは少年だった彼にとって不吉に見える何か伏在した。同時にそれは無意識にせよ、帝国時代の価値観を著しく美化し、彼にとって承服しかねる時代錯誤と断じている。いかなる講話であれ、対話であれ、第一次大戦前を是としていた。すでに廃墟となった時代を背に佇みながらも、新たな時代の胎動を見出せず、交わされる言葉は無意識のうちに過去の郷愁へと誘っていた。ドラッカーは「戦前症候群」と呼び、やがてサロンにある種のおぞましさを覚えるようにさせる。このことがウィーンを去る遠因ともなったとして、次のように記録する⁽¹⁵⁾。

「ヘムとオイゲニアは、『戦前』を復活させることに成功していた。彼らのサロンは、死んではいるものの、死にきれてはいない海底の都市アトランティスだった」

作家ジャック・ビーティは、故郷ウィーンが「ただの郷愁の首都にほかならなかった」とのドラッカーの発言を特筆しているが⁽¹⁶⁾、そこでの生活を仔細に見ていく時に、そこには明らかに政治の不毛性や人々への共通の幻滅感が示唆されてもいる。このウィーン時代の所感は、ドラッカーの後の問いに一つの重要な類推と洞見を与えてくれているように思われる。少なくとも故郷への言明は、彼自身に実質的な政治的作用を及ぼし始めていたのは、『傍観者の時代』に見られる次の記述からも窺い知ることができる⁽¹⁷⁾。

「戦前は、物という物に浸透し、人という人を麻痺させ、思想という思想、想像力という想像力の息の根を止める毒気の感があつた。戦前への執着は、ナチズムがなぜあれほどの魅力を発揮したのか、そのわけを説明してくれる」

(15) Drucker (1978), p.58.

(16) Betty (1998), p.3.

(17) Drucker (1978), p.59.

後にアメリカでの刊行を見た『経済人の終わり』において、彼は政治的概念としてその種の現実逃避的思惟を「大衆の絶望」と定義する。ドラッカーの言う大衆の絶望とは、基本的には依拠すべき価値観や信条の消失ならびに再獲得の展望の不在との関連で語られている。ことにこの問題意識は、後に全体主義批判とナチスからの離反という積極的意味合いを獲得するに至ったが、この原点をなす観察は、ギムナジウム時代に彼を取り巻く人々との交流にまで遡って理解される必要があり、いわゆる生活圏で獲得された直覚とも言えるだろう。このように見てくると、ドラッカーが故郷ウィーンで見出した政治社会は、大衆の絶望によって、20世紀中葉の全体主義支配への端緒をすでに開いていた。やがて暴风雨に成長するはずのつむじ風の発生はウィーンで目撃されていたのだが、それはやがてヨーロッパ全体に、やがては世界に憑依し、飽くことなき白蟻の貪欲をもって母胎を根源的に損なっていく。

結 語

こうした種々のドラッカーを形成したウィーンの学齢期には彼のアイデンティティの片鱗を認めることが可能である。ドラッカーが自己の人生航路と所説の形成との間に強い有意性を持つ論者であるとするならば、それらは、彼の人格、個性、思想性、民族的アイデンティティを正当に顧慮し評価するうえで不可欠の視点と言わなければならない。人は常に特定の時代状況や生育環境への帰属性を付与された存在であるためである。

そのウィーンの学校時代の生活体験に伺われる共通因子は、ドラッカーが自ら帰属する集団や時代に対する一種の覚醒の感覚にほかならない。むしろ、だからといって、ドラッカーのウィーンにおける学齢期の体験が、そのまま後の経営学説に強く影響していると推定するのは、牽強付会に過ぎるであろう。あるいは、ドラッカーの経営論の中に存在する考え方は、抽象的に彼の時代経験を焼き直したものでは決してないであろう。

しかし、ドラッカーのマネジメントについては、すでに相当な文献が存在するが、その始原に立ち戻るならば、彼の断片的な思想のいくつかは、ウィーン時代の教育に深く定位し、その系譜に基づいた議論をしているように見えなくもない。一例としてドラッカーは、マネジメントを説明するにあたり、多様な固有の特性に始まり、それが体系的かつ生産的に編み交わされていく組織原理を前提としていた。こうした個や組織の原型は、基本的にウィーン時代のオイゲニアの提示した概念に類似し、他方では、同時期に看取した回顧主義的な概念とは本質的な隔たりを示す点で、アンヴィヴァレントなものを示している

と言えるであろう。

むしろその幼年期から彼がいかなる視座を形成してきたかという問いに焦点を合わせていくことで、ドラッカーのアプローチの原意を闡明していくことが可能になってくると思われる。それが重要と考えられる理由の一つは、彼の言論形成上のコンテキストを構成する実践的課題に対して、彼固有の萌芽的なインスピレーションの所在を教えてくれるためであると言えるであろう。

ただし、ドラッカーのウィーン時代についてはいまだ十分に解明されていないところも少なくない。その点については稿を改めて検討したいと思う。

参 考 文 献

- Bischof, G., et al. (2012) *Austrian Lives*, Innsbruck University Press.
- Beatty, J., (1998) *The World According to Peter Drucker*, The Free Press.
- Bonaparte, T. H. and J. E. Flaherty, eds. (1970) *Peter Drucker: Contributions to Business Enterprise*, New York University Press.
- Buford, B. (2014) *Drucker & Me: What a Texas Entrepreneur Learned From the Father of Management*, Worthy Publisher.
- Drucker Archives (Claremont Colleges Digital Library - Claremont Colleges Digital Library).
- Drucker, P. F. (1939) *The End of Economic Man*, John Day.
- Drucker, P. F. (1978) *Adventures of A Bystander*, HarperCollins.
- Günter Bichof, Fritz Plasser, Eva Maltschnig eds. (2012), *Austrian Lives*, Contemporary Austrian Studies Vol. 21. Innsbruck University Press.
- Maciariello, J. A, and K. E. Linkletter (2011) *Drucker's Lost Art of Management*, McGraw-Hill.
- Wartzman, Rick (2013) *Drucker: A Life and Pictures*, McGraw Hill.
- 井坂康志 (2018) 『P・F・ドラッカー——マネジメント思想の源流と展望』文眞堂
- クラウス・K. / 池内紀訳 (1971) 『人類最期の日々(下)』法政大学出版局
- 坂本和一 (2008) 『ドラッカー再発見』法律文化社
- 島田恒 (2003) 『非営利組織研究』文眞堂
- 伸正昌樹 (2018) 『思想家ドラッカー』NTT 出版
- 村山にな (2013) 「ピーター・ドラッカー——ウィーンにおける総合芸術教育」『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第4号
- 村山にな (2014) 「ウィーン時代のドラッカー——芸術 (Art) としての教育」『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第5号
- ムジール・R. / 高橋義孝訳 (1964) 『特性のない男(1)』新潮社
- 村山にな他 (2015) 「芸術と経営の広がり——ピーター・ドラッカーと玉川大学の研究と教育」『玉川大学学術研究所紀要』第21号